

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日通郵省特別郵便物認可毎月一冊一日発行
明治三十一年十月一日第三種郵便物認可毎月一冊一日発行
平成二十年十二月一日発行第百一十一卷第十二号

ホトトギス

十二月号



俳句随想 〔三百十八〕

汀子

俳句会に参加する方の人数はその会によって違うが、虚子の時代、年尾の時代には人数の多少に関わらずそこにはある緊張感が漲っていた。「俳句会へ行くのは戦場に赴く心持ちで行く」と虚子は言っていた。締切時間が迫ってくる時には、誰もが私語を慎んだ。

句会が始まると黙って回ってくる句稿に目を通し、佳い句は書き留め、次の人に渡す。同じ早さで回ればいいのであるが、書き留める句の数によって時間がかかることもある。手元に句稿が無くなれば私語が始まる。ひそひそ話は案外遠くまで聞こえて来る。

学生時代、私が寄宿していた学校は、特にお喋りに対して厳しい規律のある学校であった。特別の部屋に六人程でタイプライターの自習をしていた時私達は時々お喋りをしていた。ドアが開いてマザーギブスが顔を出して「キープサイレンス！」と一喝された。ドアが閉まった途端に「何も悪いことを喋ってなかったわねえ」という声があがり思わず相槌を打つていたら、又ドアが開いて「悪い事を言わなくってもお喋りがいけないのです」と厳しく叱られた。

自分達の選句が終っても、まだ終わらぬ人が居たらどうぞ私語を慎んで頂きたい。

旬日記 汀子

平成十九年十二月一日 菅屋ホトギス会

留守の間の落葉に庭を明け渡す
ジル風に押され寒さにつかまりし
落葉なほ色をとどめてをりにけり

十二月二日 関西野分会

又しても冬の夜更かししてしまふ
櫓の燠そのまま形存しけり
櫓に火の廻りはじめし火勢かな
桜櫓 真中にして 雑木櫓

十二月二日 祝百寿 マザー三好

志継ぎ ゆく我等 冬ぬくし

十二月二日 下萌句会

考へのいつも前向き冬ぬくし
大小の落葉に今日の加はりぬ
六甲の山ふところの冬霞
笹鳴と気づきしときははや遠く

十二月三日 ロイヤル俳壇

霜月や刻々枷と向き合へる
雨となる喉うるほへり冬の朝
枯葎大地は雨を呼んでをり
締切にがんじがらめや霜月に
霜月の朝の決意といへるもの

十二月四日 有恒倶楽部

散紅葉より風離れゆきにけり
名苑の冬紅葉より歩を起す
同じ赤なかりしことも冬紅葉

これよりはあるがまなる冬紅葉
扉一つ隔て師走の街の音
一巡りして来し庭の寒さ解く

十二月四日 無名会

紅葉には色の遅速のある如く
冬ざれといふ名園のありにけり
冬紅葉庭の焦点絞りけり
迷ふかも知れぬ目印冬紅葉
大川の風の冷たき逃れ来し

枯萩を焚く日とまだ先のこと

十二月四日 伝統俳句協会関西支部忘年会

かけもちの三つの句会暮早し
街混みてはじまつてゐし師走かな
毛皮着ておごる心のなかりけり

十二月四日 浅井青陽子様句集祝句

白寿祝ぐ龍野の炉辺に皆集ひ

十二月十一日 大阪倶楽部

師走とてまだ実感のなきままに
病む人も師走の時間ありにけり
波に消えまた波に消え鴨の陣
枝離れ風の大地の待つ落葉
しばらくは落葉しぐれに立ち尽くす

十二月十一日 綿葉倶楽部

短日の用早々に切り上げし
探しもの半日書庫の寒さかな
寒さうな顔のほころぶときも見し
あせつては失敗重ね口短か

十二月十三日 清交社

波寄せて寄せて距離ある鳩の湖
枯葎雨の大地にくづぼれし
刻々と明けゆくものに霜の朝

枯葎満洒な山家建ちかはる
立ち直ることなく雨の枯葎
星空の零せし霜の朝かな

十二月十四日 工業倶楽部

散ることを忘れしもあり枯柳
通ひ路のいつからとなく枯柳
冬の鳥又庭に来て啄める

十二月十四日 時雨会

太き尾を引きずるとなく狐去る
現はれてしばし狐と分るまで
菊地寛賞ほのぼのと冬ぬくし
金屏に立てば自づと祝ぎ心
旅先の重き蒲団になじまざる

十二月十六日 野分会

櫓の火のくすぶりて来し煙かな
待つときの時間ゆつくり冬の夜
冬の夜の灯りを消して星を見る

十二月十九日 夏潮句会

猫舌に又熱燗をすゝめをり
寒禽の声はお隣かも知れぬ
挨拶をしてすぐ帰る年の暮
冬紅葉こぼれし夕日集めけり
冬紅葉には散る心ありにけり
香に濡れたるは冬薔薇五十本

十二月二十日 朝日(新春詩)

一步よりはじまる百歩去年今年
松籟に潮句へる初明り
書初の墨の香溢れ来る机辺

十二月二十二日 廣大部句碑除幕

蔵したる桜冬芽の守る句碑
海も山も谷も冬霧深きこと

廣太郎句帳

廣太郎

平成十九年十一月二日岡山開む会

雨男 面目 躍如たる時雨

吉備時雨とは嬬やかに穏やかに
太陽に近付きたくて帰り咲く

その中に笹鳴秘めて鳥語降る
一羽現れ三羽四羽五羽鴨の陣

裏庭は人を拒みて銀杏散る

十一月五日 一水会

丸の内いよよ色付く冬日向
著ぶくれて八頭身を返上す
鳩潜る比叡嵐の加勢して

十一月六日 蕉心会忘年会

猫の声師走の不協和音かな
太陽の溶け出しさうな小六月
日に貫ふ色地に還し黄葉散る
竈猫ほんまは猫とちやふんちやふ
蕉像の顔は冷たく老けてをり
蕉像も忘年会に行きたさう
日表といふ枯れ切らぬ芭蕉かな
飛行船ツエッペリン号めく小春
飛行船空船水に浮く小春
冬紅葉三枚君の梯に

十一月七日 六甲会

決断は炬燵を出でてよりのこと
君のその白き手に借る時雨傘
時雨傘畳めば君の目と合ひぬ
掘炬燵とは食進む酒進む
掘炬燵吾輩は猫踏んぢやつた

十一月七日 虚子記念文学館投句

紅葉散る館の歴史を語りつつ
十一月八日 「未央」三百号記念俳句大会

鴨の水尾大坂の陣めく乱れ
天守閣とは国守る年守る
城攻めて来る冬紅葉冬黄葉
ほつこりと冬日ずしりと天守閣
十一月十日 朝日カルチャー若草句会

昨夜の星霜となりゆく仔細かな
夜の霜朝日に命還しつつ
寒禽の声高くなる細くなる

十一月十三日 土筆会忘年会

嵐山を盾に湯豆腐屋の活気
鶴来て忌日の庭といふ静寂
冬紅葉四阿の屋根燃えてをり
上州に梯偲び空つ風
六甲の稜線丸く空つ風
十一月十五日 日本伝統俳句協会東京・神奈川合同部会
坂といふ師走の歩幅ありにけり
くさめしてよりの坂一步踏み出せり
牛込はホ誌の故郷冬うらら

十一月十八日 草木瓜会忘年会

ビルの先隠して冬の雨しとど
あなたへの気持は冬の雨に解き
人ビルに吸ひ込んでゆく冬の雨
この懐炉世界一周して来たる

十一月二十日 登高会忘年会

里神楽大蛇はプラモデル屋さん
頑に黄泉を拒みて枯芙蓉
在りし日の姿を秘めて枯芙蓉
冬蝶に対岸までの修羅場かな
里神楽大倉流の音色かな
十一月二十二日 「紫苑」壹千号記念俳句大会

底冷を解く除幕でありにけり
冬の雨句碑潤してゆきにけり
十一月二十五日 若水句会忘年会

天守閣基礎工事てふ年用意
白菜の鍋に縮んでゆく白さ
白菜の四分の一てふ角度
年用意明治の玻璃戸てふ歪み
天守なき城と知りてか浮寝鳥
十一月二十六日 目黒学園句会

闇汁に黄色く光るものは何
シヨール掛け今日は三ツ星レストラン
闇汁に全身が目となつてをり
六甲の端山昏めて冬木立
闇汁に口の歪んでをりにけり
シヨールにも老舗の女将てふ雅
人間の浅知恵纏ひ冬木立

雑詠

廣太郎 選

何か翔び何か鳴き何もかも春よ
 湾口を囲み万朶の山桜 福知山 大槻右城
 先生の手紙行間あたたかし 同 同
 闘病の不安抱きつ梅雨に処す 同 大槻秋女
 梅雨深し面会謝絶の札下げて 同 同
 たんたん輸血の指示や梅雨深し 同 同
 己が影ふみ炎天の北野坂 たつの 浅井青陽子
 裏口の犬の午睡の蚊遣香 同 同
 八九羽の帰燕の空とふと気づく 同 同
 虚子慕ふ心は老いず露涼し 長岡 安原 葉
 鶉に育てられし心と説く鶉匠 同 同
 天守閣帰燕の空を低くせり 同 同
 乱世は網戸の外にありにけり 福山 竹下陶子
 若者に恋ありダリア詩をなす 同 同
 一仏の如く蛙の睡蓮に 同 同
 汗の子が三人居候一人 神戸 山田弘子
 仮寓解く終の夜濯とはなりぬ 同 同
 引越荷汗もるともに運び込む 同 同

一幹を雨だれ走る男梅雨 熊本 岩岡中正
 胸中にいま梅雨川のはやさかな 同 同
 梅雨はげし人にやさしくせねばならぬ 同 同
 神の留守のごと鎌倉に虚子の無く 東村山 村松紅花
 鎌倉に虚子あらず海に夏終る 同 同
 夏逝くと悲しき声に鷗鳴く 同 同
 動かざる雲へ動きに行くヨット 八尾 岩垣子鹿
 炎天の沖に出たがる帆が並ぶ 同 同
 風鈴の蒼き切子の風が鳴る 同 同
 銚まはし日和つづきの高軋み 同 山下美典
 仏心を和ます蓮の花の色 同 同
 水平線上下して見ゆ土用浪 同 同
 これ以上風の彫れざる冬木かな 大阪 塙 告冬
 湯豆腐をとらへて語りはじめけり 同 同
 冬の雨木々黒々と染めかへし 同 同
 盆の月上げて故山のなつかしき 榎原 稲岡 長
 迎火のほつほつ過ぐる車窓かな 同 同
 揚花火しだるる色の揃ひけり 同 同
 午後の日に気合の入る油蟬 東京 橋本くに彦
 会釈してくしやと畳んだ夏帽子 同 同
 はんなりと座して羅美人かな 同 同
 偲ぶため薔薇よ輝かないでくれ 香川 湯川 雅
 一瞬の空の貼絵や赤蜻蛉 同 同
 朝顔の円周が風呼んでゐる 同 同

雑詠句評（十一月号より）

芳子・中正・葉

むつみ・千鶴子・保佳

憲明・美奇・とほ歩

静龍・眞理子・廣太郎

ぶらんこを並んで漕いで仲直り 熱海 嶋田摩耶子

ぶらんこの傍で何か諍をしていたのは子供達であろうか、又は大人？とも、姉妹、夫婦とも、ぶらんこという季題のもつ春らしい長閑さがあり、色々想像されて楽しい。いづれにしても、仲直りして二つのぶらんこに並んで漕いでいるというほほえましい情景が目に見えるようである。ぶらんことも半仙戯とも書くが、ぶらんこの季題をさりげなく、作者独得の表現で自ずと辺りの景色も見え・ぎいぎいという鞦韆の音迄が聞えてくるような楽しい雰囲気がある。（芳子）

子供の喧嘩は他愛もないように見えるが、やはり子供にとつては真剣なのである。しかし、それも何かのきっかけで収まる事が

殆どであろう。公園の「ぶらんこ」に隣り合わせに乗り、その心地良さに、何時しか心が和み、仲直りをする。句に直接登場してはいないが、子供の可愛さが語られている。（廣太郎）

蘇る虚子明易の稽古会 長岡 安原 葉

青春回顧の詩であり、境涯の俳句である。俳句は思いをこめて詠むものだが、作者の虚子への深い敬慕の念と五十数年前の自らの青春への思いが、美しく重なって一句となった。目つむれば今でも・鹿野山神野寺での虚子の姿が眼前に浮かび、その声が聞こえるのである。この句の思いの深さは、まず「蘇る」と一気に思いを吐露するように云った冒頭に見える。続いて「明易の稽古会」と止めて、かつての景を眼前に蘇らせるのである。

一句の軸になっているのは、「明易」という大きな季題である。「明易や花鳥諷詠南無阿弥陀」や「すぐ来いといふ子規の夢明易き」のようなその折りの名句を踏まえつつ、作者は「明易」の一語を通して、己の人生を顧み、あらためて虚子とその花鳥諷詠の教えへの帰依を確かなものとするのである。（中正）

虚子を直接御存知の数少ないお一人である作者。丁度「虚子記念文学館報」第七号に、作者の書かれた記事「虚子と鹿野山の稽古会」が写真とともに掲馨されている。昭和二十九年七月十九日に行なわれたそうだ。作者と虚子が写った写真もあり、正にこの時の事であろう。回顧の情が深い。（廣太郎）

天地有情

花子選

あの山の今朝より白し山こぶし
カーブするたび山桜里桜
夫癒えよ癒えよと梅雨の晴間かな
看取る暇狭庭の草を引かねばと
遮れるものなき行手雲の峰
朝風のわたる三瓶野露涼し
夏至暮れてビルの狭間といふ真闇
丸ビルの最上階といふ端居
逸早く蝉鳴く一樹向ひ側
朝蟬に起され起きて身支度す
赤心の遊子の忌なり夏椿
目の前に太平洋や蟹歩く
富士に灯の連なりて露涼しき夜
名を呼ばれ立つ香水の残りけり
老荘に耽り百寿の昼寝覚
吾つひに三歳児なり老の夏
文月と咳いてみてふと淋し
終りなき我の夜学の五十年

福知山 大槻右城
同 同
同 大槻秋女
同 同
長岡 安原 葉
同 同
東京 稲畑廣太郎
同 同
福岡 松尾緑富
同 同
相模原 木村享史
同 同
東京 今井千鶴子
同 同
豊中 瀧 青佳
同 同
榎原 稲岡 長
同 同

山国の雷地底よりとどろけり
風のと身に添ふ夕べ晩夏なる
室の津の夏の浜辺もちよと覗く
舞ひ降りし夏の蝶なり消えゆきし
汗拭いて妥協許さぬ設計士
花合歓のどこかに残りある昨日
シーツ白ばちんと雲の峰に干す
ペガサスの雲よ星よと晩夏の夜
夏雲へ光を返し男山
遇ふ顔のいつか替はりぬ墓参
今在りて門火の炭を拾ひけり
柔肌の桃はつるりと剥かれけり
朝の径蟬の時雨の中へ入る
蟬しぐれしぐれて人を独りにす
白髪に重ね来し年原爆忌
仕来りの残る古里孟蘭盆会
緑蔭に句碑あればすなはち聖地
緑蔭に天意のやうに降れるもの

神戸 長山あや
同 同
たつの 浅井青陽子
同 同
神戸 山田弘子
同 同
八尾 岩垣子鹿
同 同
箕面 井上浩一郎
同 同
新見 黒杭良雄
同 同
大阪 蔦 三郎
同 同
広島 山根正巳
同 同
熊本 岩岡中正
同 同

天地有情句評

汀子

夏至暮れてビルの狭間といふ真闇 東京 稲畑廣太郎

長い夏至の一日が暮れた都会。

朝蟬に起され起きて身支度す 福岡 松尾緑富

朝から蟬に促されて起きる暮らしぶり。

あの山の今朝より白し山こぶし 福知山 大槻右城

赤心の遊子の忌なり夏椿 相模原 木村享史

作者は俳句を沢山つくって亡くなった。白い花辛夷が悲しい。

純粹に生きた遊子さんを偲ぶ作者。

夫癒えよ癒えよと梅雨の晴間かな 福知山 大槻秋女

富士に灯の連なりて露涼しき夜 東京 今井千鶴子

届かなかった妻の祈り。

富士山の登山道の灯が見える夜の佇まい。

朝風のわたる三瓶野露涼し 長岡 安原 葉

老荘に耽り百寿の昼寝覚 豊中 瀧 青佳

三瓶の朝の野は露が降りて如何にも涼しげである。

百寿の昼寝の夢の中で耽る老子と荘子の思想。